

アジア・アフリカの 手

泥で染めた布や、身近な植物を用いた家具など、アジアやアフリカの物づくりには、人間の原点の素朴さや楽しさが宿っているように思える。悠久の時の流れの中で、たつぷりと時間をかけてつくられる手の込んだ品々は、まるでその時の流れを手に取り、身にまとうような『夢』の世界を与えてくれるのだ。

撮影／山下英介 P113～115、戸田嘉昭 バルドライバー P116～119 スタイリスト／石川英治 (tablestock studio) レイアウト／澤田翔 (HDO) 構成／山下英介 (本誌) 巻頭言 松山猛

繊細にしてダイナミック！
家具工房「ファントムハンズ」で見た
インド職人の驚くべき可能性

Craftsmanship in
Asia & Africa

Phantom Hands

インド製ヴィンテージ家具のオンラインストアを手がけていたディーパク・ジュリナット氏が、かつてこの地でピエール・ジャンヌレらが手がけていたミッドセンチュリー家具の再生産を思い立ち、設立。南インドのバンガロール郊外に工房を構えるとともに各地から腕利きの職人を集め、驚くべきインドの手仕事を世界に伝えている。

品質責任者

満ち足りた環境を得て
インドのクラフツマンシップは
21世紀に開花する



H. I. こちらの家具に使われるチーク材は、100年以上が経過した古材が中心。それらが手に入りにくくなった現在では、倫理的に伐採された原産地証明付きのミャンマー産チークを使うこともあるという。ちなみに「ファントムハンズ」で働く職人たちは、理想的な職場環境を提供される。無料の社宅や平均月収を大きく上回る給料、医療保険や生命保険の提供など。

E. でき上がった家具にレタッチを施し、より美しく仕上げる職人。インドに抱いていたイメージが覆される、丁寧な仕事ぶりだ。F. G. 紙やすりやグラインダーで、でき上がったパーツを研磨する作業。この工程を手がけるのは、インド北部ウッタルプラデーシュ州にあるゴーラクルという町からやってきた職人たちだ。地べたに座って作業する職人が多いのが、インドらしい。

「ファントムハンズ」のものがづくりは、広大なインド各地から呼び寄せた、50人ほどの腕利き職人が担っている。しかも木工ならラジャスタン州の歴史ある大工集団、ラタンの編み込みならタミルナドゥ州の職工家族……といった具合に、コミュニティごとこの工房に「移植」することで、バンガロールに新しい職人の生態系をつくってしまった。もちろん給与や保険などを含め、その待遇は抜群だという。そんな恵まれた環境下で働く彼らの作業は素人目にも精密で、機敏で、リズミカル。しかも木材の切り出しや研磨作業以外で、機械を使うことはほぼ皆無。クッションの縫製すら手縫いである。思わず「インドの職人おそろべし」とつぶやいてしまった。

ちなみにこの工房が家具に使用するチーク材は、伐採から100年以上が経過した古材が中心。最近では新しい木材を使うこともあるが、その場合でもトレサビリティ管理されたミャンマー産チークを使うのだとか。サステナビリティにおいても、時代の先端を行っている。

「今までが1stステージだとしたら、アーツイストとのコラボレーションを通して、インドのものがづくりを21世紀にアップデートさせるのが今後の目標です」と語るシュリナットさん。インドのクラフツマンシップは、これからが面白い。

品質責任者



この工房に集う
幾世代にもわたって
継承された幻の技

A
D



C
B



C.ソファに使われるハンドレストを縫製している老職人。なんと手縫いである！ この工房では家具をくるむ布製の袋すらも、非常に丁寧に作られている。D.カンナのような金属製の道具で、木材を削り出す職人。インドにおいてはこのような木工仕事は、北西部にあるラジャスタン州の大工の専売特許。この工房で働く職人も、ラジャスタン州の出身者が中心だ。

バンガロール郊外の小さな村にある、「ファントムハンズ」の工房にて。自然光が差し込む清潔な環境で、職人たちはきびきびと働いている。A. B.、ジャンヌレ、の椅子といえば、ラタンによる座面の編み込みであるが、この工程はインド南部にあるカライクディという町から呼び寄せた、職人一族が手がけている。楽しそうにおしゃべりしながらも、その手は決して動きを止めない。

「ファントムハンズ」による クラフツマンシップの革新

近年、再評価の機運が高まっている建築家、ピエール・ジャンヌレ。彼が1950年代にインド北部の街、チャンディールガルの都市計画を手がけた際にデザインした家具は、十数年前までは打ち捨てられ薪がわりにされていたというが、今やヴィンテージとして驚くような価格がついている。筆者も同じように魅了されたクチだが、その理由は希少性からではない。インドの職人による、精巧な家具づくりに興味を抱いたのだ。

だからインドで当時の設計図を忠実に再現しているリブログタ家具があると聞き、私はそれを迷わず手に入れた。そしてその家具をつくっている工房「ファントムハンズ」の存在を知り、生まれてはじめてインドを訪れるに至ったのだ。

「ファントムハンズ」の工房は、インド南部のIT都市、バンガロールの郊外にある。そのオフィスは自社製品とインドのヴィンテージ家具とが見事にコーディネートされており、趣味のよさに驚かされる。こちらの代表をつとめるディーパ・シユリナットさんは以前金融アドバイザー会社を経営していたエリート。洗練された趣味を持つ彼だからこそ、「ジャンヌレのデザイン」と「インドの手仕事」という、この家具が秘めたふたつの可能性を見出せたのだろう。彼は極めて冷静な分析に基づき、インドのもののづくり事情を語ってくれた。

「インドには、世界ではもはや失われてしまったクラフツマンシップが、今もなお残されています。95%手仕事でつくられた品が、この国では普通に流通してい

品質責任者

ピエール・ジャンヌレが手がけた、インドはチャンディーガルの都市設計。そこで使う家具をデザインする際に彼が心がけたのは、インドで容易に手に入る材料を使うこと。そしてその気候風土に合ったものづくりをすることだった。極めて簡潔な設計も、チーク材を使うことも、座面に通気性のよい籐のメッシュを使うことも……。

すべては彼の、この地への思いから生まれたのだ。

そんなジャンヌレの姿勢にリスペクトを捧げた「ファントムハンズ」は、当時のチャンディーガルで家具製作を手がけていた職人を、アドバイザーとして招聘。オリジナルの設計図が残っているモデルだけを選び、完璧に再現することを目指したという。その製作におけるこだわりは、前ページのとおり。高騰するヴィンテージの価格や、粗悪なレプリカが出現しはじめていた昨今の状況を鑑みると、このファクトリーこそが、ジャンヌレの思想を次世代に繋ぐ、正統な継承者なのかもしれない。

DATA バンジャブ大学の学生寮や、ホテルで使うためにデザインされたアームレスチェア。籐の結び目を背もたれの溝に収まるように設計するなど、シンプルながら細やかな配慮に心打たれる。●モデル名／「PH25」 ●サイズ／幅44.5×奥行52.5×高さ86×座面の高さ44.5cm ●色展開／写真のナチュラルのほか、ブラック、無塗装を展開。¥260,000(カサ デ)

インドの神業 フレンチデザインと 『ファントムハンズ』の 『プロジェクト・チャンディーガル』シリーズ

アジア&アフリカのクラフツマンシップ①



品質責任者